

「1わかると、
10わからないことが出てくる。」

それが、研究なんですわ。」

「植物研究雑誌」の五代目編集長、大橋広好 東北大学名誉教授 理学博士の言葉

「私もいつか論文を植物研究雑誌に載せてもらいたいと思って勉強したんですよ。かつての少年は、うれしそうに言いました。」

大橋広好名誉教授（写真）は、今年創刊一〇〇周年を迎えた
「植物研究雑誌」の五代目編集長。

創刊者である植物分類学の父、牧野富太郎博士の意志を受け継ぎ、「植物研究雑誌」を守りながら自らも植物の研究に没頭し、走り続けている現役の研究者です。

「植物研究雑誌」は日本の植物分類学の礎を築いた専門誌で、創刊から一〇〇年経った今なお隔月発行され、世界中の植物分類学と生薬学の研究者にとって憧れの存在であり続けています。

ツムラの創業者、津村重舎もまた、この研究雑誌から多くを学び、漢方の人々の健康に役立てるために植物の研究にのめり込んだ一人でした。

植物分類学と生薬学は、高品質な漢方薬を人々に提供し続ける上で、安全で正しいものを見極めるために必要な地図のようなものであり、不可欠な学問です。日本の植物分類学と生薬学とを結び付けているこの研究雑誌がなければ、今のツムラはありません。

大橋先生が初めて「植物研究雑誌」と出会ったのは、中学生のときでした。

高度な専門誌でありながら、できるだけ多くの人に読んでほしいという方針で編まれた「植物研究雑誌」には、十代の少年の心をつかむ記事が所々あったそうです。この研究雑誌が、世界的権威を持つ研究者だけでなく、アマチュアにも分け隔てなく門を開き、すべての人の植物に対する研究と理解を推進している点も、津村重舎の「漢方を広く一般に広め、貢献したい」という強い想いと重なりました。

研究には終わりが無いのだと大橋先生は言います。それが、ワクワクするのだとも。

「植物研究雑誌」の五代目編集長として、創刊者の意志を受け継ぎながら若き研究者を育て、進化を続ける大橋先生のように、私たちツムラも、創業者の想いを忘れることなく、「漢方」の力を必要としているすべての人のために革新し続けます。

※5月27日の朝刊の広告で「植物研究雑誌」とツムラの関係についてお伝えしました。

自然と健康を科学する。漢方のツムラです。

